

①ことば

ともにつくる「ことば」の学習

1 全体テーマとことば部テーマとの関連

本校でめざす「公共性」は「民主主義に基づく社会生活を創る資質・能力を育てること」であり、「友だちと自分の違いを排除せずに理解し考える力を発揮する子ども」を育てることをめざしている。

〇〇性と名付けられたものは、知識の総体として量で測れる静的なものではなく、人間関係の中で生きてはたらく動的なものである。そして、質的な捉えでこそ、育成が可能なものである。

この全体テーマは、人と人をつなぐ言葉の重要性を示唆している。なぜならば、言葉という思考と伝達の手段が、多様な関係のなかで確かに機能してこそ、関係の中で学ぶ、という営みが子ども達にとって可能になると考えられるからである。

ことば部では近年「ともにつくる」を実践テーマとしてきた。「ともにつくる」の主語は、子どもと教師、子どもと子ども、教師と教師、すなわち学習活動をつくりだす仲間すべてである。私たちは主体的な学び手として言葉を介しての理解を深め、表現を磨き、互いの関係性の変容を探求している。

2 ことば学習分野で育成したい「公共性」

第1章-4で述べたように、開発1年次、本校で育みたい「公共性」に関わるリテラシーの全体像はまだ見えていない。トップダウンの研究ではなく、自分たちで自分たちの授業実践からボトムアップでリテラシーの内実を明らかにしようと努力しているからである。

以下は、ことば部の今年度前半の実践のふり返りの一部分である。現在進行形の実践研究の一端を紹介したい。

学年 単元・題材名	「公共性」を育むリテラシー	「公共性」に関わる学習方法や指導上の工夫 (違いを発見するー違いを排除しない、ために)
2年生 「スイミー」	<ul style="list-style-type: none"> 人物の気持ちについて自分の読み(考え)に自信をもつ 考えを話し、違いを考えながら聞く 考えの理由を言葉で表現する 意味のあいまいな言葉を質問する 	<ul style="list-style-type: none"> 〇息づかいを合わせて音読を始める 〇ふきだしを使うことで登場人物になりきり、登場人物に寄り添って考えるようにする。自分の考えを書く時間をしっかりとる 〇対立する考えが出るように、指名するときに配慮する 〇文中の言葉を根拠にして、意見を言う
4年生 詩を楽しもう 「春のうた」	<ul style="list-style-type: none"> かえる(登場人物)の立場や気持ちになってじっくり考える おなじ言葉に着目しても、人によって考えが分かれることを知る 違いがあることを知り、考えのよさやおもしろさを認め合う 	<ul style="list-style-type: none"> 〇どんな意見も言える雰囲気を作るよう普段から心がける 〇思い浮かべる春のイメージを「自然・生き物」「春の気分」など観点を与えて話し合わせる 〇子どものつぶやき(「くも」が「雲」か「蜘蛛」のどちらを表すか)から、みんなで話し合う課題をつくり、各自の考えをもたせる 〇自分の読みやイメージを絵にすることによって、想像できる世界が違うことを可視化させる
5年生 「個性と我について 考えよう」	<ul style="list-style-type: none"> 4人チーム内で自分のやりたいことをはっきり主張し、責任を果たす 決着つけがたい事態をチームで知恵をだしあって乗り越える 話し合い結果を短く全体で報告する 	<ul style="list-style-type: none"> 〇学習の手引きを作成し、チーム学習の見通しがもてるようにする 〇毎時間、チーム内で簡単に役割の担いぶりを相互評価させる。(よかったか、困ったか、お互いに役にたったかなど) 〇発表は3分間と時間を区切って、簡潔に伝える工夫を考えさせる

3 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

低学年 1年「聞くなってどんなこと」の学習

(1) 1年生の実態

本校研究テーマの「公共性」の「違いを排除せず」の大前提となるのが、相手の話や主張をきちんと聞けることであろう。公共性を育むベースになることを培うのが低学年のこの時期の最大のねらいとなるのではないかと考える。

入学以来、ファミリー内での「ファミリーでおはなし」の時間をとり、互いに身近な出来事や気づきを話し聞き合うことを続けてきた。6月頃から、スピーチに移行し、ファミリーでお話も並行して行っている。話す側は、少しずつ話すことへの抵抗感がなくなり安心して話すことができるようになってきている。一方で、聞く側は、最初は興味深く耳を傾けるが、話の途中で口を挟み、話者の意図とは異なる方向に話が逸れることもある。

(2) 学習の実際

① 目標

- ・スピーチのモデルを見聞きして、聞くとときに意識することを知る。
- ・「ファミリーでおはなし」をして、話し手の内容が分かったかを書くことができ、友達とのやりとりを楽しむ。

② 本時の展開

・スピーチをする人と聞く人の劇（担任）を見て話し合う。授業者ともう一人の教員が話す人と聞く人になってやりとりを見せる。1回目はいい加減な態度で聞く様子を、2回目は一所懸命聞いて話し手のやりとりが活発に進む様子を見せた。それを巡って子どもたちが話し合う。

○先生（聞き手）は知らんぷりしたりあくびをしたりして、失礼だ！

○2回目はうなずいたり、笑っていたりして、話している方はうれしいと思う。

- ・ファミリーでお話をする。

教師の劇を見たことを受け、聞き方を意識してファミリーでお話をさせた。

いつものファミリーでお話のやり方に加え、聞いて思ったことや話し手に伝えたいことを付箋（黄色）に書かせた。このことで、しっかり聞くことを自覚し、聞いていて話し手の話したことを理解していたかがわかるようにした。また、話し手は、別の色（ピンク）の付箋に、話して気持ちよかった聞き手に一言書いて渡すことにした。

③ あるファミリーのやりとりから

あるファミリーは、聞き手の3人がとても熱心に話を聞いていた。話し手の話はわかりづらい部分もあったが、野球の試合中、具合が悪くなって病院に行ったという状況をよく理解してコメントを返している。話し手は、相手に伝わってそれが付箋に書かれて自分に返ってくる喜びを経験できたであろう。K児は、このファミリーの中でも最も真剣に話に耳を傾けていて、ピンクの付箋をたくさんもらっていた。Y児は「Kくんが（聞き方が）一番良かったからこれからはお手本にしたいと思います。」と記している。

(3) 考察と課題

付箋を用いてやりとりをしたこと、教師の劇でモデルを示したことは、聞くことを自覚化する手だてとして有効であった。

聞くことの本質は、いい態度で聞こうとすることだけではなく、聞いて理解することであろう。そして聞いてわかったことからやりとりが生まれ、次の応じ合いにつながってこそ「聞く」ことが深まると言える。「聞いて」「応じ合う」ことが「公共性」を育むリテラシーであるとすれば、聞くことを自覚化させる学習を繰り返して行っていく必要があり、さらなる実践の積み重ねをしたい。

中学年 3年 問題づくりの学習「ちいちゃんのかげおくり」

(1) 3年生の子どもたちの実態

3年生にとって難しいのが、相手の話や主張をきちんと聞くことであろう。折に触れて話し合いをさせ問題を解決させるようにして経験を積み上げる必要がある。また自分たちで判断するような場面を多くとるように配慮して話し合ったことに責任を持たせたい。そこで、グループで共に考え、行動できるように話し合うったり、自分の行動や発言を意識させ振り返ることができるというようなことが様々な場面で行われるようにしたいと考える。

(2) 学習にあたって

① 物語を読むこと

物語というのは、状況も人物も自分たちとかけ離れている。だが決められた状況、設定のなかで人物が様々なことを考え行動する。子どもたちにとっての疑似体験であり、共通の話題でともに考えることができるという利点がある。3年生の子どもたちは、気持ちを想像することも直感的に豊かに考えることはできる。だが、文脈に沿って根拠をもとに考えることは、まだ十分にできるというところまではいっていない。

② 話し合いの学習

生活やさまざまな場面で子どもたちの話し合いをさせている。教卓前に出てきて全体に発言するなどできるだけ互いが見えるような交流をさせるようにしている。生活のいろいろな場面で自分たちで話し合い責任を持って生活できるようにしたい。

③ 本題材「ちいちゃんのかげおくり」と問題づくり

空襲で独りぼっちになった少女が静かに息を引き取るという「あまんきみこ」の作品である。子どもたちにとって結末の「悲しみ」には衝撃があったようで、「かわいそうだ」「悲しい」「本当のことかな」といった感想がだされた。家族それぞれの心情、戦争という状況、空襲の様子、「ちいちゃんの気持ち」など、文脈を丁寧に読むことで理解が深くなる。ことばに即し、友だちと考えを交流させながら読み進められるように子どもが作った問題をもとに話し合う学習を設定した。

(3) 学習の実際

文章を読みあらかじめ問題と答えを用意しておく。当日担当した子どもは、その中から授業の前に板書する。次の問題は、研究授業の時の一部である。

○夏のはじめのある夜、ちいちゃんが起きたのはなぜでしょう。

A, サイレンが鳴ったから。 「いいです」

○なぜお母さんが『さあ、ちいちゃん、お母さんといっしょに走るのよ。』といったのでしょうか。

○のような問題を出した子どもが司会をして学習が進行する。子どもは自分で答えを用意しているのである程度納得すると「いいです」と答えてしまう。また、ちょっとしたニュアンスが違うだけでも「違います」という反応を返す。友だちの意見と自分の考えをすり合わせるのが難しいのである。そこで教師が「お母さんは、なぜあせっていたの」「あせっていたことが分かることばが書いてありますか？」のように掘り下げるような質問を行った。

(4) 考察と課題

子どもたちは、友だちの問題であるので楽しんで学習に参加する。子どもなりに考えた発言が見られた。だが、この時期ではまだ話しかき合わず、並列的に意見が出されていたり、焦点化しにくい様子が見られた。子どもだけの話し合いにせず、教師の関わりが必要になるところである。

「公共性」という場合このような話し合いを繰り返しながら、共に考えることを学ぶのであろう。

4 公開研究会での授業提案や協議会討議を経て

(1) 部会として授業改善のために目指したことやそのための手だて

- ・じっくり聞き合あえるための話材、題材、モデルなど、教師が提示するものがねらいや実態にマッチし望ましいか吟味する。
- ・人とつながることばが使えない子ども達（特に帰国児童の実態から）に、『1つの花』はハッピーエンドなのか？という子どもの問いから出発した話し合いを仕組んだ。
- ・6年生ではいろいろな話し合い方を経験させた。異質な考えを持った他者と出会う対話を仕組む。例えば資料にインフォメーションギャップをもたせる、自分の考えをワークシート上で図示するなどの工夫。

(2) 具体的な成果や問題点

- ・ねらいに適した学習材の開発。
- ・個人の考えが、他者の視点が入ることによって変わる場面が確認できた。自分以外の人はどういう行動をするかの予測する、というリテラシーの存在（必要性）が話題になった。

(3) 協議会での話題・意見・質問など

- ・ことばの力をつけていくことで「公共性」が育まれるのか、「公共性」を育むためにことばの力をつけるのか。パネルディスカッションで教える→パネルディスカッションを教える→さらなる吟味を。
- ・日常の聞いたり話したりすることの学習や指導はどう行っているのか。スピーチなど継続的にやっていることは？
- ・話し合い、聞き合いの学習では教師がモデルを示すことも有効であろう。
- ・話し合いや読み深めの学習で、批判的な意見が出た際、子どもたちにどう返していくか。
- ・一往復半のコミュニケーションの一往復半とはどういうことか。
- ・年間計画を知りたい。
- ・道徳と国語の関連、ことばという学習分野でどう扱っているのか。
- ・教師のコミュニケーション力は、どのように高めていけばよいのか。
- ・リストラや介護などで家庭が崩壊し子どもの生活に重い現実がある地方から来たが、お茶小の子どもの授業中の発言（言葉）にどこまでリアリティーがあるのか、正直に、さびしい気持ちである。

(4) 協議会を経て、今後の課題であると認識したこと

- ・「公共性」を育むリテラシーについて実践を通して明らかにしていく必要がある。
- ・どの学年でも、相手のことばに耳を傾け関わろうとする気持ちや聞き取る力を、さらに育てていく必要がある。そのための授業改善の方策を工夫していく。
- ・「学びの概要」の中で、「公共性」を育てるのに必要な観点に焦点化し、「公共性」を育むカリキュラム案の作成を目指したい。
- ・「公共性」に討論は必須のもの。しかし討論には、①攻め立てる②丁寧に調べる、の意味がある。相手の弱点を攻め立てる子が多いが、そこに止まらず、比べて考えあうことが大切。「ちょっとわかってきた」「まだわからないことがある」というように、公共的な認識を育て、深めること。